

公園のフォアとして機能

遠景からの見え / 広大な敷地と起伏に富んだ地形、そして周囲に開けた計画敷地の状況をふまえて、風景式庭園におけるフォアのように、公園の風景を美化する装置としての機能を与える。白い壁面群が背後に控える深緑の木々を際立たせる。

中景からの見え / 5つのユニットを屏風状に雁行させる。敷地前方の道路からは道なりに沿って歩くと、建物の表情が変化する。多様なアクセス動線、建物間のスリット、壁面の丸窓を介して、建物後方への視覚的な抜けを作る。

近景からの見え / 壁面上部は、隙間を設けた板張りによって、建物内の換気と採光を行う。隙間からは内部の構造柱と筋交が見えることで建物全体に透明性を与える。出隅では板張りの小口を千鳥に張り合わせる。

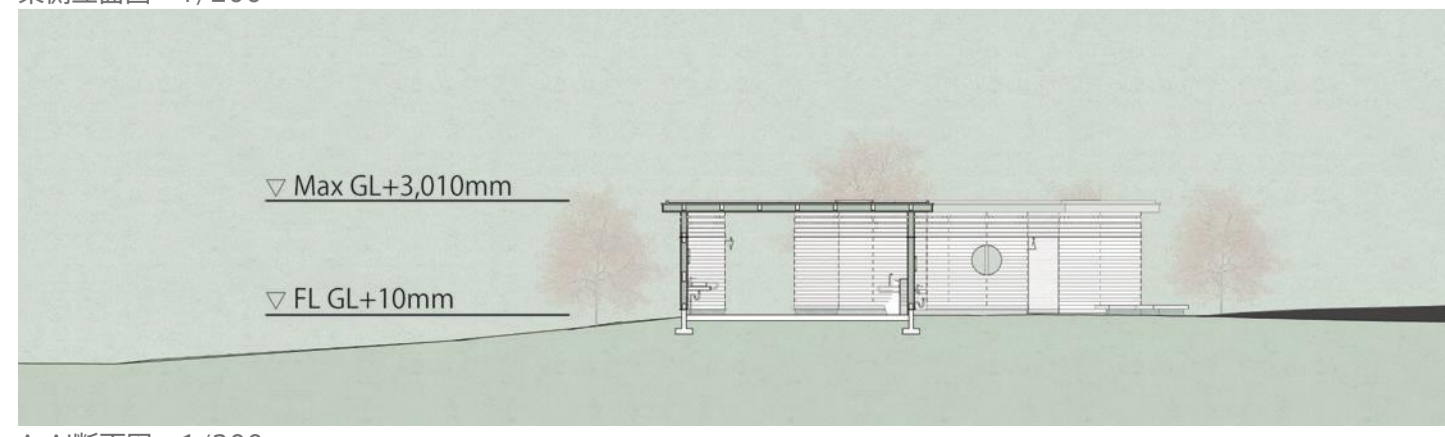
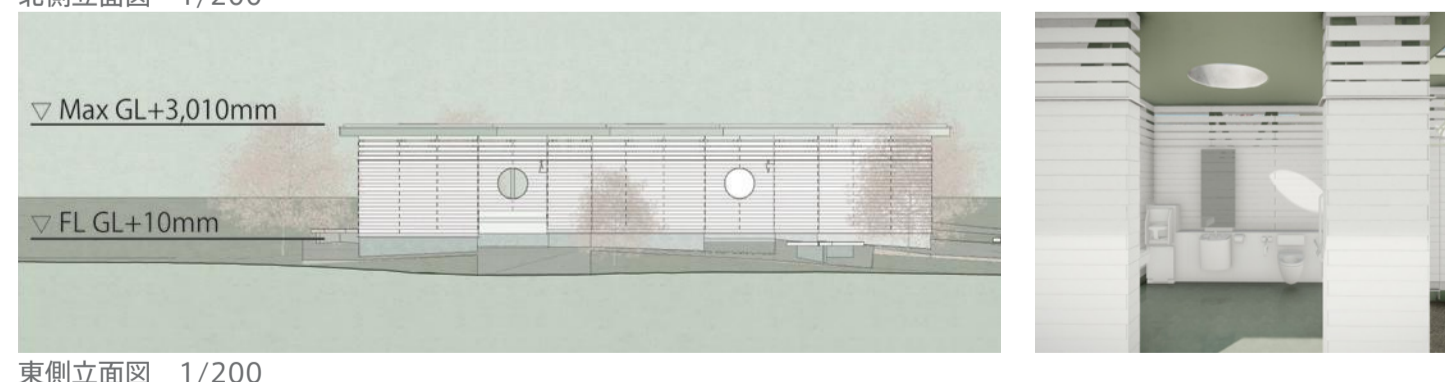
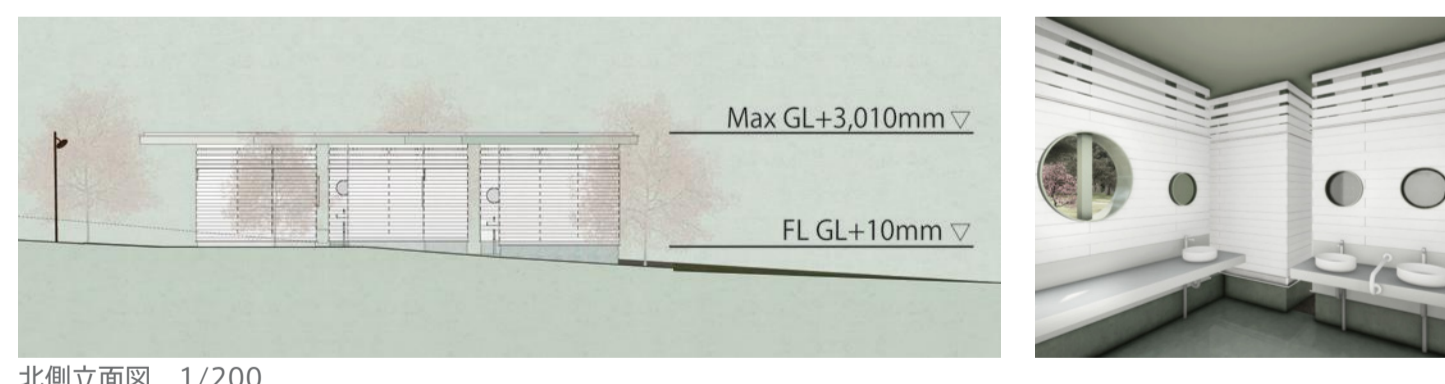
抽象的存在から具象的存在へ / 遠景では、白い壁面が抽象的な存在として、公園の点景となり、近景では、入隅と出隅の交錯が具象的な存在として、アクティビティの多様なきっかけを作り、同時にそこが広大に広がる公園全体の風景を見るための視点場となる。

環境とエネルギーへの配慮

建物基礎の合理化 / 基礎は環境負荷の少ない布基礎とし、敷地の傾斜を考慮して最も地面が平らで、地面の掘削の少なくなるエリアに建物配置する。傾斜方向に対して、斜めの角度で基礎を作ることは力学的にも合理的な方法である。また基礎のために掘削した土は、建物周囲の回遊動線を作るための地面の高低差調整に再利用する。

構造部材の規格化 / 5つのポリウムユニットは、それぞれ3M x 3Mを1ユニットとし、1Mグリッドで構造を計画する。柱は全て90mm角とし、梁は全て梁せい150mmで格子状に屋根材を構成する。耐力ブレースの配置は、十字形と括弧型で統一し無理のない構造計画とする。構造材の優劣がないため、建設の工程が簡略化され、コストが削減される。

メンテナンスへの配慮 / 構造や外壁に使用する部材は、一般的な流通材の寸法で統一し、軒の出は外壁の劣化に対して十分な距離を確保する。このような基本的な配慮によりライフサイクルコストを軽減する。



パブリックトイレとしての機能

閉じつつ開く / パブリックな建物でありながらプライベート性の求められる施設機能に対して、内部の利用動線や周囲からの視線の方向を検討し、最小限の個室エリアは閉じつつも視覚的な抜けを多く作る。ひだのように閉じたり開いたりすることで内外の空間の質を調整する。

裏表をなくす / 建物全体に斜めの方向性を与え、周囲に回遊動線を設ける。建物の表側と裏側の差をなくし、周囲の自然環境と調和させる。内部へは様々な角度からアクセスが可能で、アクセシビリティの高い配置計画とする。

多用途な洗面エリア / 洗面エリアを便器から独立させ、洗面以外の用途にも利用しやすい空間とする。花見の時期の混雑を想定し、人の動線が外部に流動しやすく、内部の利用動線にも余裕をもった平面計画とする。

ボーダーレスな全体像 / 女子トイレ、男子トイレ、バリアフリートイレ、掃除道具入れのそれぞれの機能に対して、利用動線を明確に分けながらも、全て同じ大きさのユニットを連続させ全体像を構成することで、機能に対して優劣がなく匿名性の高い群造形を作り出す。

ランドスケープの計画

大きな円環と小さな円環 / 根岸森林公園では、円環状のメイン道路が公園全体の回遊動線の骨格となっている。計画敷地内のアクセス動線は、大きな円環と呼応する小さな円環を作り出す。2つの円環は、8の字の幾何学を作り、行き止まりのない新たな回遊動線を形成する。

桜のゲートと植栽計画 / 既存の桜の木を活かす全体配置計画とする。南からのアプローチに対しては、既存の2本の桜の木が利用者を迎えるゲートを作り出す。また、建物の入隅に3本の新たな桜の木を計画する。桜の木々を縫うように屏風状の壁面が連続する。

雁行式庭園による高低差処理 / 雁行式庭園の手法は、複数の軸を持ち、幾何学的な質を持ちながら、風景式庭園のように、視点によって変化に富んだ見え方を作り出す手法である。建物間の入隅は出隅に比べて敷地の傾斜と床面との高低差が小さくなる。入隅からのアクセスを多くすることで、敷地内の微地形に対応しつつ建物周囲の回遊動線を可能にする。

